

起るや、向尊及波木井公と不合、飄々然として靈廟を去りしに非ざる歟、其時興尊の心中果して、一派組織、異流唱導、延富對峙、等の思考ありしや、否や、所傳書多くは口傳的、にして幾多研究の末ならでは斷定するを得ず、前記せる統紀所述の如きも、波木井公の落髮は弘安四年と記す、然るに興師『弗_三于俗家_三所_三能識_三』と訓誡せし聊か自家撞着あるを見る況や保守的退歩的の彼派の所懷をや、首肯の點何處にかある、今後又資料蒐集に努め更に陋見を披かむ識者幸に諒とし、愚子に教ふるに恪なる勿れ。

余の宗教觀

高一 小坂田 正己

凡そ我々人間が、世に生存して行く上に於、誰一人として煩悶苦惱のない者はない。生があれば死があり、老があれば病があり、戀の歡樂には必ず煩悶苦痛が伴ふ。此様に、人生の大海には幾多

の苦しみがある。人間は何うにかして、此の苦しみから脱れやうと考へた。そして、或る人生を超越した、崇高偉大なる者を求め、之を人格化して崇拜し、信仰し歸依し其事に依て自己の慰安幸福を得て現實の苦みを忘れやうと計た。此の人生を超越した或者を信仰し歸依し其に依て自己の慰安を計ると云ふが、即ち宗教である。であるから宗教と云ふものは第一義のものではなく第二義のものである。若し人生に色々の苦痛も亦く煩悶も亦く幸福であつたならば宗教の必要は起らない宗教の必要な譯は人生に色々の苦痛煩悶があるからである。故に宗教の起原に對する人々の見解が何の様に多種多様であつても自分は宗教も哲學と共に他の社會制度と同じく自己の生活を豊富にし活動を統一し平和を保ち幸福を増大しようとする人間生存上の欲求から起つて來たものだと思ふ。

既に宗教が人間の欲求から生じて來たものであるとしたならば、其の説明の仕方が色々に異つて居ても、要は人生を統一しようとして、設けられ

た、第二義的假定に外からきいのである。神の創造を説いたり佛の絶對を唱へるのは、其れが人生を統一するのに、最も便利な良法であるからである。即ち一義生活の目的を達するための善巧方便である。

大凡宗教とか、哲學とか、科學とか、謂う人文上の現象は、皆同じく目的を達するために、設けられた、異曲同致の支持法である。

けれども宗教は他の哲學や科學などと異つた志向を持つて居る。それであるから自然宗教特有の様式が生じて來る政治には政治特有の様式があり藝術には藝術特有の様式があると一般である。それで宗教には人生を統一する方法として、二種の特種の様式を用ひて居る、それは佛陀と衆生、神と人、靈と肉、と云ふ様に二元的對立を説く事である。此の二元的對立を説く事に宗教の價值はあるのである。即ち佛教には佛と衆生とを設けて佛を信仰の標的とし我々衆生は之を信仰し精進努力する事によつて自己の慰藉安心は得られると説

き基督教には神と人とを設けてキリストを信仰しキリストに祈りて自己の慰安は得られるのであると説く。斯様に二箇の對立を説いて自己の勢力已外に客觀の力即ち加被力とか救済力とかを豫想する事によつて宗教的氣分は生じて來るのである。是は宗教に於て最も大切な條件であり、また要素である。宗教に此加被力とか、救済力とか、を豫想すると云ふ要素が無かつたならば、宗教の價值は少しもきいのである。

斯様に宗教に二元的對立を説く處に宗教そのものの生命があり價值があるのである。けれども但だ佛と衆生天堂と地獄と云ふ如に二箇の對立的概念を説くだけでは未だ高等なる眞の宗教と云ふ事は出來ない。何故なればと云へば。それは二元的對立を説くために人の注意と勢力を分裂せしむると云ふ嫌があるからである。現今の様に人智が發達し宗教已外の活動に於ては悉く一元の假定の上に生きて居る時代には二元的對立を説く間に何うしても一元的暗示があくては駄目である。何故駄

であるか、それは宗教の統一法と其他の統一法とが矛盾し衝突するからである。

處で其の二元的暗示とは何んかものか、と云ふに佛教の如に一往佛と衆生と云ふ二箇の對立を立てるけれどもその信仰の標的たる佛は自己を離れて外にはない主觀を客觀化したるもので、其れを信仰し精進努力する事に依て本尊の當相即ち理想境に到達する事が出來ると説くが如きものである

斯様に人智の發達した時代には二元的暗示があれば駄目であるとは云ふものの、又一元的のみにて二元的對立を説かなくてはならぬ宗教の生命は持續されまい若し宗教に二元的對立を説かなくては二元的のみであつたならば宗教は偏に自力教となり終つて倫理の自我實現と異なる處がない事になる元來宗教に二元的様式を用ひるのは他の社會制度等とは異つた志向を有してゐるから其志向に従つて特有の様式を用ひるのであると云ふ事は前に云つた通りである。此の二箇の反抗的弊念を説く事によつて人の理想を高め努力の意義を明にせし

むるのである、即ち宗教の他に異つた人生の統一法である又一元的暗示を云ふものは宗教發生の根本意義である、故に元意目的を重じて特殊の方法は失しては駄目であり又方法のみを偏重して目的を度外しても駄目である、此の兩者相俟つて始めて眞の宗教と言へるのである。佛陀が權實二智を以て權實二教を説き衆生を化益せられた意も茲にあるのだと思ふ。

要するに宗教と云ふものは人間生存上の欲求から生じて來たものであつて、其の欲求を満足せんために二箇の様式を設ける、けれども二箇の對立の間には二元的の暗示が必要である。人智の低い者は二元的對立を説くのを聞いて佛或は神に信仰を捧げてその加被救濟力を豫想して自己の慰安を得、人智の進んだ者は二元的興味によりて生活して行くのである。であるから宗教は二元的様式を離れては倫理と異なる處はなくあり宗教は滅亡し二元的暗示がなくては高等の宗教とは云へないといふ事に落着する。